

未完の始まり
—未来のグンダーカンマー—
Wunderkammer to Come:
From the Uncompleted,
a Beginning

2024年1月20日(土)–5月6日(月・祝)

リウ・チュアン Liu Chuang
タウス・マクハチエバ Taus Makhacheva
ガブリエル・リコ Gabriel Rico
田村友一郎 Yuichiro Tamura
ダン・ヴォー Danh Vo

博物館は展示物によって国や地域の伝統、自然、記憶を可視的に配置し、美術館は美術作品によって芸術の歴史を跡付け、美的な経験をもたらします。博物館や美術館などのミュージアムは、展示品をもとの場所や文脈から切り離し、白い空間の透明な格子に置き直すことで、体系的な分類と逸話的な統合を行います。そして、読むことではなく見ることを通じて、ひとつの歴史や価値を伝えます。

ミュージアムの原型といわれる「ヴァンダーカンマー（驚異の部屋）」は、15世紀のヨーロッパで始まりました。絵画や彫刻に加え、動物の剥製や植物標本、地図や天球儀、東洋の武具や陶磁器など、世界中からあらゆる美しいもの、珍しいものが集められたこの部屋は、見知らぬ広大な世界を覗き見る、小さいながらも豊かな空想を刺激する展示室でした。しかし、大航海時代の始まりとともに他文化からもたらされた事物で構築されたヴァンダーカンマーには、集める側と集められる側の不均衡や好奇のまなざしも潜んでいました。18世紀の啓蒙の時代に博物館と美術館は分化され、今日の公共施設としての制度が確立されますが、このときミュージアムの収集や設立資金を支えていたのはさらに拡大した植民地でした。植民地主義はミュージアムの基盤になっただけでなく、ここから地球規模の物の流通、技術や情報の伝播が始まり、時を経るごとに速度と規模を増して現在に至っています。

グローバル化が進み、世界が均質化していくようにみえるなかで、ミュージアムはいかに文化や伝統を伝え、またどのように他文化や他民族と出会ってもらえるでしょうか。産業都市におけるミュージアムとして、情報や移動技術の急速な進展と人間の未来について考えることも、大きな課題といえるでしょう。かつて「博物館行き」は物の終焉を意味する言葉でしたが、本展の作家たちは、歴史や資料を調査・収集し、彫刻やオブジェ、映像とともに再構成することで、時を超えた事物の編み直しを試みます。美術館の隣に新たに博物館が開館するにあたり、世界の不均衡から始まったミュージアムの未完の現在地から、ひとつの歴史や物語に収斂することのない、未来に向けたポリフォニーを目指します。

1F:展示室8

	リウ・チュアン Liu Chuang 22		田村 友一郎 Yuichiro Tamura 21		19		
					18		20
2	8	9, 10, 11	13				
		ガブリエル・リコ Gabriel Rico 12	14	15	タウス・マハチエヴァ Taus Makhacheva 17a		
	1				16		17b
	3	4	5	6, 7			

ガブリエル・リコ Gabriel Rico (1980-)

- 1 From Pythagoras to Penrose (Hare)
[ピタゴラスからペンローズへ (野ウサギ)] 2019年
羽根、PVC、セメントベース、鹿の枝角、ロープ、ネオン、野ウサギの剥製、ナイフ|タグチアートコレクション蔵
- 2 No podemos ver el interior del sol directamente (Pentágono y máscara)
[太陽の内部を直接見ることはできない (五角形とマスク)] 2022年
真鍮、マスク、ネオン|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 3 To compound the small differences VII
[わずかな差を埋めるにはVII] 2022年
ビーズ、エポキシ樹脂で覆った板|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 4 If the Sun had been reduced in size because of the space between I and Us, much more would it have lost its color (glass square)
[もし太陽が私と私たちの間の空間でより小さくなっていたとしたら、その色はもっと失われていただろう (ガラスの四角)] 2020年
色ガラス|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 5 XLVII from the series—More robust nature... more robust geometry
[よりたくましい自然.. よりたくましい幾何学(47)] 2020年
ヒトデ、鹿の角、鉄輪、石、ネオン|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 6 The second cause is meant to be an explanation of the first (Nopal)
[ふたつめの原因是ひとつめを説明するためのものである (ノパル)] 2020年
ウィチョル族の伝統的な手法で刺繡したキャンバス|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 7 The second cause is meant to be an explanation of the first (Biznaga)
[ふたつめの原因是ひとつめを説明するためのものである (ビズナガ)] 2020年
ウィチョル族の伝統的な手法で刺繡したキャンバス|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 8 VII from the series—The tastes of superlative and the admirable holiness
[最上級の味わいと見事な神聖さ(7)] 2021年
ネオン、枝、真鍮、金箔|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 9 I take comfort in your ignorance (the greatest obstacle of all) I
[あなたの無知を慰める (最大の障害) I] 2023年
色ガラス|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 10 I take comfort in your ignorance (the greatest obstacle of all) II
[あなたの無知を慰める (最大の障害) II] 2023年
色ガラス|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 11 I take comfort in your ignorance (the greatest obstacle of all) III
[あなたの無知を慰める (最大の障害) III] 2023年
色ガラス|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 12 With sweetness amongst the brains
[頭のなかでもっとも甘美な] 2021年
手彩色のセラミック|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 13 The second cause is meant to be an explanation of the first (Páramo, The oak)
[ふたつめの原因是ひとつめを説明するためのものである (パラモ山、オーク)] 2020年
ウィチョル族の伝統的な手法で刺繡したキャンバス|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico
- 14 El Horóscopo de Jesús (Dan, Richard & Joseph)
[イエスの星占い (ダン、リチャード&ヨセフ)] 2023年
枝、鉄、真鍮、ネオン、鹿の剥製、砂|Courtesy of the Artist and Perrotin ©2020 Gabriel Rico

タウス・マハチエヴァ Taus Makhacheva (1983-)

15 リングロード 2018年

ミクストメディア | Courtesy of the Artist and M HKA, Museum of Contemporary Art

16 トラベルレポート No.0172931 2019年

印刷、シルクスクリーン、エンボス | Courtesy of the Artist and Shaltai Editions

17a セレンディピティの探掘 2020年

身体志向の工芸品(真鍮、ガラス、金、磁器) | Courtesy of the Artist and Frans Masereel Centrum

17b セレンディピティの探掘 2021年

映像(8分10秒) | Courtesy of the Artist

18 Цумихъ (アヴァル語で“鷹にて”) 2023年

映像(59分45秒) | Courtesy of the Artist

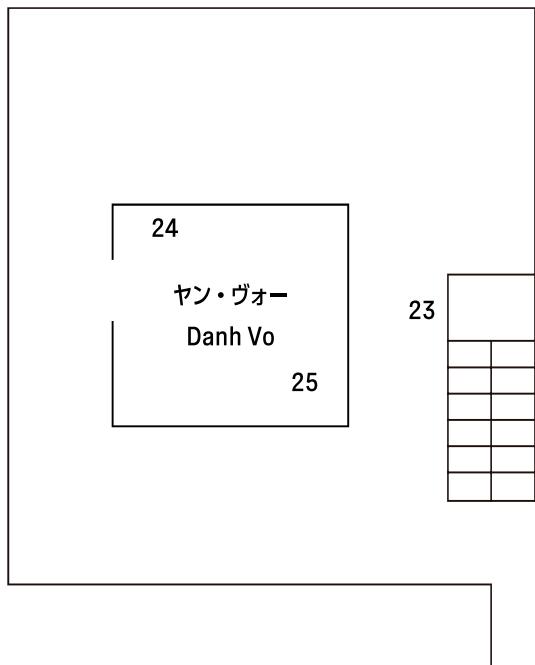
19 42.6729165, 47.314644 2023年

写真 | Courtesy of the Artist

20 Ясалъул яс (アヴァル語で“の娘の娘”) 2024年

映像(57分3秒) | Courtesy of the Artist

2F:展示室1



田村 友一郎 Yuichiro Tamura (1977-)

21 TiOS 2024年

ジョン・レノンの生成AIナレーションによるゴルフシミュレーション映像、宇宙船を模したセット、樹脂製パンカーフ、スマートフォン用ガラスの砂、チタン製ゴルフドライバー、ペーパーバック「ライ麦畠でつかまえて」、ステンレス製寝椅子、アファール猿人ルーシーのチタン製の骨、ステンレス製モノリス型照明、レントゲン写真、iPhone

リウ・チュアン Liu Chuang (1978-)

22 リチウムの湖とポリフォニーの島Ⅱ 2023年

映像(55分45秒)

ヤン・ヴォー Danh Vo (1975-)

23 2.2.1861 2009年-

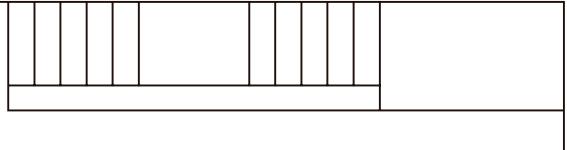
紙にフン・ヴォーによる書

24 無題 2023年

インクジェットプリント、フン・ヴォーによる書、マクナマラの木製額

25 Take My Breath Away 2017年

ローマ時代の男性立像《脚と足》の大理石片(紀元2世紀)、真鍮留め



ガブリエル・リコ Gabriel Rico

[1980年ラゴス・デ・モレ(メキシコ)生まれ。グアダラハラ(メキシコ)拠点。]

博物館には、絶滅種や各地の固有種などの動物の剥製が展示されていますが、ガブリエル・リコの作品では、ウサギや鹿の剥製が人類の叡智と宇宙の法則の象徴である幾何学形態に対峙しています。南米の神話に登場するこれらの動物たちは、ネオンや鉄などの工業製品でできた幾何学を静かに観察し、あるいはそれに敵対しているようです。自然と人工、有機物と無機物、有限の時間と永遠の真理が対を成す作品は、メキシコ先住民の動物崇拜神話の介在により、現代における人間と自然の調和の道を示します。絵画には、ウィチヨル族の伝統的な技法であるニエリカ(毛糸絵)とチャキラ(ガラスピーズ)が用いられており、先住民の知識を美術に取り込み、消費社会のなかで再び宇宙と繋がる精神性が模索されています。

タウス・マハチェヴァ Taus Makhacheva

[1983年モスクワ(旧ソビエト連邦)生まれ。モスクワおよびドバイ(アラブ首長国連邦)拠点。]

中央に置かれているのは、タウス・マハチェヴァのルーツであるダゲスタン共和国にある山の模型です。《リングロード》(2018年)は、山頂を一周する環状道路の敷設プロジェクト案です。入口も出口もないこの山の道路建設にかかるプロセスと費用、契約書が壁に取り付けた台座に提示されています。もしこの不可能にみえる事業を実現することができるなら、この彫刻作品を手に入れることができます。しかしできない場合は、展覧会が終わり次第、速やかに作品を作家に返却しなければいけません。

《トラベルレポート No. 0172931》(2019年)は、深海から山の頂きまで、未踏の地を自在に旅する旅行記です。紙には、電磁場中の荷電粒子で時間を操作できるという装置の浮き彫りがプリントされています。疫病や戦災により移動が困難になったとき、想像力が私たちを自由な旅に導くのです。

《セレンディピティの採掘》(2020年)は、1971年にロシアのソチで開催された未来科学者の会議で提案されたアイデアをもとに、タウス・マハチェヴァが再構築したものです。ペンダントのパーツはそれぞれ機能を持ち、それらを身につけると他者や環境との新たな関係が生じます。このマルチプルは、世界で人々が共存するためのペンダントなのです。

映像作品《TSUMIKH(膺にて)》(2023年)では、日本でも知られた詩人であり祖父であるラスール・ガムザートフの、胸像や新聞により作られた国民的詩人としてイメージと、マハチェヴァ自身の私的な記憶の差異を浮かび上がらせながら、なにが公的な像を形成するのかを問います。《娘の娘》(2024年)は、曾祖父のブロンズ像を祖父の石膏像が、さらに母の肩幅のコンクリートブロックが包み込む彫刻制作の様子を収めた映像です。彫刻の歴史がマトリョーシカのように重ねられたブロックは、ダゲスタンの山のなか、座標《42.6729165, 47.314644》の位置に設置されています。

マハチェヴァは、歴史記録や文化的な遺物、個人的な記憶にユーモアとアイロニー、壮大な空想を加えて作品を開拓しています。そこでは、近代以降の伝統のありかや文化の真正性、国家と結びつくアイデンティティが考察されています。

田村友一郎 Yuichiro Tamura

[1977年富山生まれ。京都拠点。]

直立歩行を始めた最初期の猿人ルーサーのチタン製の骨の一部が、寝椅子に置かれています。チタン(地下に眠る巨人タイタンから命名)と骨の融合が発見されたのは20世紀半ばですが、チタンは人間の身体の一部としてだけでなく、ゴルフクラブや建築資材、はては戦闘機や宇宙船にも応用され、今は携帯電話として私たちの手のなかに収まっています。猿人ルーサーの名前は、60年代に流行したビートルズの「ルーサー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンド」から来ています。会場に響くのは、AIにより蘇ったジョン・レノンの声。ジョンは語ります—「より速くより遠くへ」。二足歩行により前脚が自由になって以降、さまざまな技術を開発してきた人間の移動の範囲とスピードは、ますます加速しています。猿が携帯電話を手にし、SF映画の主人公に、そしてさらにあらゆる人物に、遂には人間を超える存在に…? かつて人間が人工的な自然の中で楽しんだゴルフ場の上に情報を発信・集積する携帯電話でできたUFOが現れ、液晶画面が碎けてできた砂を明るく照らします。そこには一本のチタン製のゴルフクラブとペーパーパックの『ライ麦でつかまえて』が。二足歩行を始めたルーサーは、そして人類の未来を語っていたジョン・レノンは、もはや自らが生きているのか死んでいるのかわからなくなっているようです。

人間と技術が融合してチタン化した私「TiMe(チタンの私)」は、今という「時」を感じることができるのでしょうか。人間が存在の根柢とする独自性はそんなに自明なものなのか、技術が効率をあげればあげるほど、

ますます時間が足りないように感じるのはなぜなのか。田村友一郎は、遙かな時間のなかの今という時、そして人間と技術の関わりを問います。

リウ・チュアン Liu Chuang

[1978年湖北省(中国)生まれ。上海拠点。]

『リチウムの湖とポリフォニーの島Ⅱ』(2023年)では、急激に変化する現代中国の姿が、フィールドワークによる都市のインフラストラクチャーや各地の周縁部での調査を交えたサイエンスフィクション的な想像力により描き出されます。SF小説『三体』における生存のための遙かな時空間の移動と人類と科学技術の関係、そして現代の携帯電話や電気自動車に使用されるリチウムの採掘と環境への影響、さらに遡って植民地主義の始まりといわれる南米の銀の採掘と輸送航路の開拓。エネルギーの獲得や資本の流通により拡大してきたグローバリゼーションが、時を交差しながら語られます。しかし、グローバル経済が世界をますます画一化していくようにみえる今、リウ・チュアンは未だ世界が少数民族や、人間の可聴域を超えた無数の生物によるポリフォニーに満ちていることを知らせます。作家いわく、「地球は歌う星」です。ポリフォニーは、権力に強いられた沈黙や、また逆に恋人同士の間に甘く漂う静寂のなかにも、豊かに潜んでいるのです。

ヤン・ヴォー Danh Vo

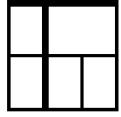
[1975年バリア(ベトナム)生まれ。ベルリン拠点。]

自らが手入れをする郊外の庭の花を写した写真の下には、ヤン・ヴォーの父により花の名前が描き添えられています。図鑑から切り取られたような花々の写真は、美や博物学的な知識、さらにその背後に働く様々な力を思い出させます。写真には、庭で摘まれて街の花屋で売られる花の写真も混在しています。花屋の花は、恋人や親しい人たちに贈られる、ロマンチックで愛に満ち、ときに下心を秘めた商品になります。そして花々の作品は、ベトナム戦争を推し進めた米官房長官ロバート・マクナラマの息子の農場で育った胡桃の木の額に収められています。

幼少時に家族とともにベトナムから逃れてデンマークで育ったヤン・ヴォーの作品には、自身や家族の経験と、彼らの存在を否応なく翻弄する強国の覇権が窺われます。ともに展示されている手紙もまたヴォーの父が描いたものですが、その内容は1861年にベトナムで殉教したフランス人宣教師が父に宛てた遺書です。若き殉教者はそこで、自らを庭師としての神により摘み取られる春の花にたとえています。花と人間はどちらも生死ある存在で、自らの意志に関わりなく移動せざるを得ないときがあります。

紀元2世紀のローマ時代の脚だけ残った男性立像も、美と暴力に関わるもので。作品のタイトル『Take My Breath Away』は、アメリカ海軍の協力のもと冷戦下の1986年に制作された映画「トップガン」の主題歌からきています。ギリシャ彫刻と戦闘機アクション映画の思わぬ結合は、男性の肉体美にアメリカのミリタリズムを嗅ぎつけ、ギリシャを源流とする欧米文化の解体とその修復を暗示します。

花や人体彫刻には、確かに強国や市場の論理、欧米の文化の真正性への批判が透けて見えますが、それでも重要なのは両者に美があることです。美は時折権力に利用されますが、その複雑さのなかで可能性の扉を開き続けるのです。



Toyota
Municipal
Museum
of Art

豊田市美術館